

学習資料① 「河原者が担った仕事」

- ① 都市の清掃，葬儀などの町を清める仕事
- ② 屋根ふき，壁塗り，井戸掘り，石垣づくり，庭造りなどの自然に手を加える土木関係の仕事
- ③ 味噌や塩などの行商，皮革製造（皮なめし），鳥獣の肉や魚介の販売
- ④ 染色，竹細工，履物づくり，武具づくりなどの手工業
- ⑤ 運送，渡し船，飛脚などの交通関係の仕事
- ⑥ 護衛，刑罰などの下級役人の仕事
- ⑦ 猿楽，能楽，くぐつ（あやつり人形）などの芸能

参考文献「部落史に学ぶ」（外川 正明）

学習資料② 「当時の人々の考え方」

当時の人々は、地震や洪水、火山の噴火などの天変地異、死や病氣、出産、犯罪、火事など通常の状態に変化をもたらす出来事に関わることを「ケガレ」として非常に恐れました。「ケガレ」は、科学的に全く根拠のない考え方ですが、死や血などに触れると、触れた人もけがれるという意識が形づくられました。

「ケガレ」を恐れる観念は、平安時代から強まり、日常の状態に戻したり、ケガレの伝染を防いだりするなどの「ケガレ」を「キヨメ」る役割を担う人々（河原者）が必要とされていきました。彼らは井戸掘りや 死んだ牛馬から皮をとってなめすことも行っていました。それらの仕事は社会にとって必要であり、すばらしい文化を築いていきました。河原者と呼ばれる人々の中からは、銀閣の庭園づくりに影響を与えた善阿弥など、優れた文化の担い手も現れました。

「河原者」と呼ばれる人々は、当初、「特別な人々」という「畏怖・畏敬」の対象とされていました。しかし、一方で、「キヨメ」る力をもつ者は、自分たちの恐れることに関わることのできる不思議な力をもつ人、自分たちとは違う暮らしをする人と見ていました。また、この人たちが住む河原も人間の力が及ばない特別な場所と考えられていました。そのため、こうした人々は、食事のつきあいなど日常の生活を一緒にしないなど差別されていました。しかし、この頃は、身分が固定されていなかったので土地をもって移住すれば生活を変えることもできました。

[当時の河原について]

自然のままの広大な面積を有していて、「キヨメ」るための水があるところでは、洪水により流れが変わる場所であり、人の支配が及ばない特別な場所であったとされています。

参考文献：「令和5年度版 なくそう差別 築こう明るい社会 同和問題 基礎 資料」（鹿児島県教育委員会）

「人権学習教員用手引き「湯浅モデル 研究実践集」（湯浅町教育委員会）

「人権学習パンフレット「部落差別の解消に向けて」（和歌山県教育委員会）

学習資料③ 「銀閣(慈照寺)と又四郎」

室町時代、庭造りの名人といわれた「善阿弥」という人がいました。8代将軍足利義政も、彼の技術をこよなく愛していました。有名な銀閣などの庭も、彼と彼の子「小四郎」そしてその孫の「又四郎」の三代によって完成されたと言われています。善阿弥の孫、「又四郎」も庭造りの名手であり、その技術は高く認められていました。日頃から自分の技術を高めるために本を読み努力していましたが、自然に手を加える土木関係の仕事をしているということで差別されていました。この時代は、人間の生死や自然にかかわって生活している人が差別されていたのです。

参考文献：「部落史に学ぶ」(外川 正明)

学習資料④ 「龍安寺の石庭の謎」

白い砂の敷かれたこの庭には15個の石が置かれています。15という数は、仏教の教えで完全を意味します。ところがこの庭をながめるお堂の縁側のどこに立っても一度に、14個以上見ることはできません。どこから見ても、どうしても1個以上の石が他の石に隠れてしまうのです。そうなるように考えられた上で、巧みに配置されているのです。

この庭の一番奥の石の裏側に、なぜか文字が彫られています。近づいてよく見ると、「小太良」と「清二良」(良は郎の略字)という人の名前です。この二人は、当時の河原者と呼ばれた人々です。15個の石が決して全て見えなように完璧に作られた庭の石の一つに、なぜ河原者として差別された二人の名前が彫られているのか、今も謎のままですが、少なくとも龍安寺の石庭作りに、何らかの形で河原者たちが関与したことは間違いないと言えるのではないのでしょうか。



龍安寺石庭の石



龍安寺石庭の石の刻み

参考文献「部落史に学ぶ」(外川 正明)